

『大つごもり』について

浦川知子

いることは、読者に強く伝ってくる。又、『大つごもり』は、職業作家を目指してからの作品でもあるので、作品にかける意気込みも感じられる。

『大つごもり』は、明治二十七年十二月三十日発行の『文学界』第二十四号に『大つごもり』として発表された。その後、一葉によって、用字・用語・句読点などが多少修正され、明治二十九年二月五日発行の『太陽』第二巻に再掲された時には、『大つごもり』と改められていた。木村真佐幸氏によれば、これは誤植ということである。『大つごもり』は、一葉が丸山福山町へ引っ越して来てから『暗夜』（明治二十七年七月「文学界」第十九号に発表）に引き続き第二作である。一葉のものにしてはめずらしく恋愛を扱わず、維新後の新しい体制もようやく軌道にのって、資本主義経済も伸びてきた明治中期の東京の市民生活を取り上げている。この作品は、「貧乏という運命のもとに生まれてきた人たちが背負っていかねばならない人生」が皮肉られて書かれているが、これは、まさに一葉自身の貧困の生活体験より生み出されたものに他ならない。龍泉寺町で荒物屋を営んだ時の商人としての体験や、当時女流歌人の一人であった中島歌子の「萩の舎」において歌を学びながら、住み込み女中（注1）として働いた時の体験が参考となって書かれている。それだから、一葉が作品で訴えて

『大つごもり』は、御身代を町内一に持つ山村家に奉公する、貧しい家に育てられた十八歳の少女、お峰が、病床に臥している伯父（お峰の育ての親でもある）に二円の金を、奉公先から借りるように頼まれるが、突然の放蕩息子の帰宅で不気嫌であった御新造に受け入れてもらえず、居間の懸け硯の中に入っているお金の一部を盗んでしまう。けれども、放蕩息子の石之助が残りのお金の全てを持ち去ったため、お峰の行為は発覚されずに済むという話である。この作品では、後半、特にお峰の盗みの行為以降にウェイトが置かれている。この最後の部分は、作者、一葉が、この作品において最も言いたかったこと、それが記載されている。だから、この部分から作者の気持ちを深く読みとらなくてはならない。先に、『大つごもり』という作品は、一葉自身の貧困生活より生み出されていると書いた。一葉がこの作品を書いた頃、彼女はどんな暮らし向きをしていたのか知ることには大切であると思う。ここで少し、明治二十七年頃の一葉について述べたいと思う。

明治二十七年五月一日、一葉一家は、竜泉寺町（現在の東京都台東区龍泉）から本郷の丸山福山町（現在の東京都文京区西片あたり）へ引越した。小説で身をたてようと、新たな決心を胸にいだいて。それまでの一葉は、昼は荒物屋を営み、夜は小説を書くという生活を竜泉寺町で送っていた。少しでも生活が楽になるようにと始めた商売もふるわず、毎日、お金に悩む生活が続いた。食べて行こうとすれば働かなくてはならぬ。働くことに時間をとれば、小説を書く時間はなくなる。毎日、働くことに追われた生活にいや気がさしてきた中で、彼女は、二月二十五日、平田禿木（注2）によって、田辺竜子、鳥尾ひろ子（この二人も一葉とともに歌塾、「萩の舎」に通っていた）が家門を開くことを聞かされ、「万感むねにせまりて、今宵はねぶること難し。」と日記につける程、くやしい思いをし、早く文学をもって世に出たいというあせりを持った。このことによって、彼女は、三月頃から専ら小説を書きたいという気持ちに駆り立てられるのであった。又、竜泉寺町に暮らしているうちに、一葉は貧困ゆえの社会悪そのものを見つめるようになり、吉原の存在そのものにも疑問を感じ始めていった。そして、「国子はものにあたえしのぶの気象とぼし。この分厘にいたくあきたる比とて、前後の慮なく、やめにせばやとひたすらすゝむ。母君も、かく塵の中にうごきめ居らんよりは、小さしといへども門構への家に入り、やはらかき衣類にてもかさねまほしきが願ひなり。」（「塵中につき記」二十七年三月）（注3）とあるように母も妹もしてもしよがない商売がいやになっていた。これらのことがきっかけとなって、小説を書くだけの生活を選択するのである。この時、一葉は二十三歳であった。「わがもとのこゝろはしるやしらずや、兩人ともにすゝむる事せつ也。されども年比うり尽し、かり尽しぬる後の事

とて、此みせをとぢぬるのち、何方より一銭の入金もあるまじきをおもへば、ここに思慮はめぐらさざるべからず。」（「塵中につき記」二十七年三月）とあるように、決めるまでには後の生活を心配しているが、小説を書くことはやめられなかった。それは、一葉が小説家であったことの唯一の証明と言ってよい。「さらばとて、運動の方法をさだむ。まづかぢ町なる遠銀に金子五十円の調達を申しこむ。こは、父君存生の比より、つねに二三百の金はかし置たる人なる上、しかも商法手びろく、おもてを売る人にさへあれば、はじめてのこととてつれなくはよもと、かゝりし也。此金額多からずといへども、行先をあやぶむ人は、俄にも決しかねて、来月花の成行にてといふ。」（「塵中日記」二十七年三月）。一葉は引越が決まるとすぐに資金集めに動き回っている。このころの一葉一家は何をするにもまずお金の算段からはじめなければならなかった。このことは、『大つごもり』のお峰の伯父安兵衛がお金に困っている場面によく反映されている。丸山福山町に移ってから一葉一家の暮らし向きは良くなる兆しはなく、増々、悪くなるばかりだった。一葉の二十五年という短かい人生の中で、最もどん底の暮らし向きといってもよい程だった。七月一日にはいとこの幸作が病死して、一葉の気持ちは暗くなるばかりであった。「萩の舎」での住み込みの苦しみは、妹、邦子の「かきあつめ」によると「中島にいたることは五ヶ月なりけれどこのうち稽古もできず勝手のことのみしてたゞ下女の如し。」とあるように下女同然の扱いを受けて、一葉には耐えられるものではなかった。又、「萩の舎」は、上流階級の子女が通う歌塾であったので、一葉が士族の娘として育てられたとはいえず、彼女らとは生活環境がかなり異なり、あらゆることにおいて彼女らと意見が違っていた。このようにして、彼女を多くの面で

苦しめた。彼女は、苦惱を小説に表わすことによって解放を求めたのである。そんな中で、十二月、『大つごもり』は書かれたのである。

二

『大つごもり』は、「上」と「下」に分かれている。「上」では、お峰の苛酷な労働の描写より始まり、お峰が伯父に、二円のお金を奉公先の山村家より借りるように頼まれる所までが書かれている。「下」では、伯父の息子の三之助がお金を取りに来る「大晦日」の一日だけにしぼっており、御新造への説得、盗み、そして結末へと話を一気に発展させている。作者が「上」「下」に分けたのは、時間的な関係であり、特別の意図があるものとは思えない。

「上」において、お峰は山村家からお金を借りるように伯父に頼まれた。二円というのは、伯父、安兵衛が田町の高利かしより三月しぼり(注4)で借りた金の返済期間を延長させるために必要な〃をどり〃(注5)のお金、一両二分とお正月に三之助に食べさせるための大道餅の代金である。お峰は、このことを伯父に聞かされた時、しばらく考えていたが、承知する。給金の前借で奉公に上がった彼女にとって、二円のお金を山村家から借りることが容易でないことを知ってはいたが、どうしてもことわれないわけがあった。彼女は、七歳の時に父を事故で失った。その二年後には母までもはやり病で失った。女中奉公に上がるまで、安兵衛夫婦に親代わりとなってもらい育った。だから、お峰は伯父一家を見捨てられず、ぜひひでも御新造から二円借りて、伯父の恩に報いたいと思ったのである。

ところで、安兵衛は、いつお峰に頼むことを思いついたのであるか。もはや、お峰に頼るしかないと思っていたのだろうか。それと

も、お峰の顔を見て思いついたのであるか。それを示すことばは書かれていない。いずれにせよ、安兵衛は、八百屋を営んでいたのだから、金銭を得ることのきびしさは痛いほどよくわかっていたはずである。山村家へ一年間、奉公に上がっていても、給金の前借りをして女中となった身では、二円のお金でさえ、借りることは難しいことを察してもよさそうなものだが。安兵衛一家の生活は、それ程貧窮を極めてたとみえる。そして、安兵衛は、病床にある身となって気が弱くなり、八百家を営んでいた頃、正直安兵衛とあだ名がつけられた程、貧しい人たちには親切であったから、世間も自分と同じように優しくしてくれるだろうと信じていたのかもしれない。だが、どうであっても、伯父から工面を依頼された二円のために、お峰は悲劇にも盗みを働くはめになってしまっているのである。

山村家でのお峰の奉公ぶりは読者が必要以上に彼女に同情を買わせるように描写されている。この小説の冒頭「井戸は車にて綱の長さ十二尋(注6)、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゅうくと吹きぬきの寒さ、……」は、お峰が苛酷な労働を強いられることをより一層、暗示している。霜氷の暁に起こされ、二十六杯も手桶にあふる程の水を汲まされた時、下駄の鼻緒がゆるんでいて、ころんでしまった。その時、こわした桶一つについて御新造の描写は、「此桶の価なにほどか知らねど、身代これが為につぶれるかの様に御新造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、その日一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、この家の品は無代ではできぬ、主の物として粗末に思ふたら罰が対るぞえと明け暮れの談義、来る人毎に告げられて若き心には恥かしく、その後は物ごとに念を入れて、遂には籠想せぬやうに成りぬ……」というのであった。

山村家の御新造は女中に対してきびしかった。そのことはお峰の女中奉公をより辛くさせていたのであろう。この辛い女中奉公は、作者、樋口一葉の「萩の舎」での体験により小説の中にとり入れられたと言える。和田芳恵氏は『樋口一葉の人と作品』の中で「一葉は、一時でも自分の位置において女中とはこういう悲しいものだと思ひ、その思ひ方の深かったことを『大つごもり』に生かした」と言っている。

山村家の御新造は、前に引用した描写によると、人間的な寛容な性格は一切持たず、支配階級が持ちがちな自分より身分が低い人を見くだす度量の狭い性格しか感じられない。しかし、後藤積氏は、『商人としての樋口一葉』の「大つごもりにみる金銭感覚」という論文において、御新造は、「恵まれた身分というよりも山村家を采配し、家賃の取り立て、出入りの大工、左官への仕事の割り振り、賃金の支払いなどの事務は、すべて女主人が受け負っていたと思われる。(中略)感情の起伏が激しく気分屋の性格も家庭の主婦であるとともに家主としての実務に携わっているものの緊張から来るものであってむしろしっかり者とみるべきであろう。お峰が手桶を毀したとき、此家の品物は一つとして無料のものはないと叱りつけたのもただの吝嗇ではなく家を背負っているもの実感でもある。」と述べている。この見方は、家の経営を推し進めていく上での山村家側の立場から見たもので、大変ユニークなとらえ方だと思ふ。

御新造が持ち合わせた短所は、他人に対して冷やかであることその他にもう一つある。それは、少し前に引用した後藤氏の文章にも書かれているが、「感情の起伏が激しく、気分屋の性格」である。山村家についてお峰に忠告する受宿の老媪は「少し御新造は機嫌かいなれど……」と言っている。後に、お峰はこの気分屋の性格を持った御新造

のために、伯父に依頼された二円の工面ができなくなり、盗みを決行してしまうのである。

そんな山村家へお峰は「勤め大事に骨さへ折らば御氣いらぬ事も無き筈」と意気込んで奉公へ上がり、給金の前借があったせいか、それとも一生懸命に奉公に励むことは育ての親、安兵衛夫婦に対する最大の親孝行であったせいかわからないが、「世間に下女つかふ人も多けれど山村ほど下女の替る家は有るまじ(中略)思へばお峰は辛棒もの、あれに酷く当たれば天罰たちどころに、此の後は東京広しといへども山村の下女に成る物あるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば……」と世間にうわさされた程、一年間、懸命に働いた。「思へばお峰は辛棒もの」この言葉から彼女は女中の模範であることが理解できるばかりでなく、私には、お峰の苦勞がひしひしと伝わってくる。

『大つごもり』で、お峰は心の優しい子として描かれている。伯父の家を訪ねた時、「この金は少々なれど」と自分の小遣の残りや、ほまち(注7)として客からもらった巾着や半襟をお土産として持ってきている。「勤めにくくも御座んせぬ」と可酷な労働を隠し、伯父らを心配させまいとしている。又、お金を盗む時には、「罰をお当てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ」と言い、盗んだ後には「伯父様に疵がつかぬやう我身が頓死する法は無きか」と言い、大勘定においては「伯父様同腹で無きだけを何処までも陳べて聞かれずは甲斐なしその場で舌かみ切つて死んだなら命にかへて嘘とは思しめすまじ」と言うように、お峰は盗みの罪を何から何まで受けようとしている。こういった伯父思いで優しい心を持ったお峰が、盗みを働かなくてはならなかった彼女の運命を知った

時、私たちは、この上ない同情に引かれるのである。

「下」段は、山村家の放蕩息子、総領息子でもある石之助の詳しい描写から始まる。「思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて、十五の春より不了簡をはじめぬ。」とある。しかし、石之助の不了簡(注8)は、継母である御新造に原因がある。「母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にとの相談、十年の昔より耳に挟みて面白からず、今の世に勘当のならぬこそをかしけれ」とあるように、御新造は腹違いの息子には冷たかった。石之助は継母とおりが悪かった。自分は総領息子でありながら家の人は自分をほじき者にするのがどうにも我慢がならず、山村家の人々に対して反抗し続けたのである。

「大つごもりの構造」において、前田愛氏は、「主婦の資格に欠ける女主人の御新造と模範的な奉公人のお峰」、「放蕩むすこの石之助と孝行息子の三之助」、「生さぬ仲の石之助と伯父夫婦に養育されたお峰」、「山村家の家庭不和と安兵衛一家の睦まじさ」というように、それらが対立的に取り扱われていることを指摘し、又、それらの対立は最終的には「豊かな山村の家と落ちふれた伯父の窮状」(「一葉作風の展開」塩田良平氏)に通ずる、と言っている。ところがその後前田氏は「しかし、この対立を富める山村家の頹廢と貧しい安兵衛一家の善良さという図式に単純化し、一葉の発想の類型性を云々するにとどまるのならば、それは『大つごもり』の炙所を見のがしてしまふことに通ずるだろう。」とつけ加えている。一葉がこの小説の中でテーマとしたことは、金持ちでありながら他人に対しては冷やかな目を持った山村家と、貧しいながらも人情があふれんばかりの人間たちの集まった安兵衛一家の比較でもなければ、各々の登場人物の全て

が持ち合わせた性格の披露でもない。与えられた運命によって身動きできない、自ら人生を変えることのできない人間たちの悲劇なのである。もちろん、作者、一葉もそういった人間の一人であることはいうまでもない。

島木英氏は、著書、『樋口一葉』の中で、樋口一葉の作風は、「個々自己と関係の現実性」であると言い、その後、「主人公の行為の結果つくられる、つくり出される諸々の△関係性▽ではなく、すでに自己が存在するというそのことにおいて、そのこと自体において、一般的に人間がもたなければならぬ関係性である。自己の意志にはかわりなく、好むと好まないにかかわりなく、主体に与えられた△関係の現実性▽それ故に絶対的にその生を規定していく人間の△関係性▽あるいは△関係構成▽である。それが、一葉のほとんど全作品を貫ぬく主要なモチーフでありテーマである。彼女にとってこうした△関係性▽こそ、人間の生を支配する大きな要素と思われたのである。……」と説明していて、さらに、「一葉の作品には、これらの△関係性▽が複合的にあらわれてくる。作品の世界はこれらの△関係性▽の複合化の上に成立してきているのである。」とつけ加えている。島木英氏のこの考え方は、『大つごもり』にもあてはまると思う。なぜなら、お峰、安兵衛は共に貧乏という運命を背負って生きているし、山村家の石之助も又、御新造と折り合いが悪いため、不了簡をしなければならぬ運命を背負っているのである。そして、作者、一葉自身も又、貧困という運命に悩まされているのであるから。

さて、運命の日、大晦日。お峰は、多亡でしかも放蕩息子の突然の帰宅でいらだっている御新造に、再び前借の話をもちかける。彼女の期待にもかかわらず、御新造は一度は承知しておきながらも、軽くあ

しらってしまう。このことは、彼女に悪心をいだかせる。悩み苦しんでいる所へ、娘の初産の為に出かけた御新造と行き違いに三之助が訪ねてきた。三之助を手ぶらでは帰せないと思うお峰は、自分の行為を目撃できる人が家にいないことを確認すると、盗みを決心し実行してしまう。

三

本文は盗みをしたお峰に対して、「三之助に渡して帰したる始終を見し人なしと思へるは愚かや。」と結んでいる。これについて村松定孝氏は、「一たん作中の主要人物の心理に作者が入りこんで、読者にその人物の内部を代弁しておいて、急に第三者の立場にかえって、その人物の心理や行為を批判する一節を附す。これは一葉の立体的描述法とでも云ったものである。(中略)作者のねらいはこうしたサスペンスをたくみに弄しながら文体に振幅のうねりを呼んで、その振幅のエネルギーを駆って、運びに速さをつけつつ、一息に最後のクライマックスの峰へ小説を駆けのぼらせてゆく」と『評伝樋口一葉』の中で述べている。この一句は物語の展開の一つのふし目となるので、読者に再び新たな関心を持たせるのに役立つ。新たな関心というのは、お峰の犯行が露見してしまうのではないかということである。この表現の発想は一葉ならではのもので、大変ユニークである。ところで、「見し人なしと思へるは愚かや。」とあるが、それでは一体、誰が見ていたというのだろうか。御新造は娘の初産で少し前に出掛けてしまっているし、大旦那は釣からまだ帰宅していない。娘たちは庭で追羽子に夢中になっていて、小僧は使いからまだ戻ってきていない。お針子は二階にいてしかも耳が不自由である。そして若旦那

は居間の炬燵で夢の真最中である。よってこの家の一階に居たのは若旦那の石之助とお峰、そして三之助である。しかし、三之助はこの家の人ではないので居間に上がれない。そうすると、石之助が要注意人物になる。眠っていたとされていた石之助が事の始終を見ていたとある説がある(松坂俊夫氏『樋口一葉研究』・湯地孝氏『樋口一葉論』など)。では、それを裏付けることのできる文章は本文中にあるのか。

まず、その後の石之助の行動であるが、彼は家を出る時に、「お母様御機嫌よう好い新年をお迎ひなされませ、左様ならば参りますと、暇乞わざとうやうやしく、お峰下駄を直せ、お玄関からお帰りではないお出かけだぞと図分々しく大手を振りて」帰っている。平常から気が合わない御新造に対しての挨拶は馬鹿丁寧であり、お峰にはわざわざ下駄を備えさせている。この態度は、何か下心があるものかと思えない。又、この夜の大勘定の時、御新造に言いつけられ、お峰が懸け硯を開けるとお金は全て消えていて、入っていたものは「引出しの分も拝借致し候 石之助」という紙きれ一枚と受取り一通であった。ここで石之助はお峰が盗んだ二円の残り十八円を持ち去ったということが明らかにされるが、屋根やの太郎の借金のもどり金を石之助の目の前で懸け硯の中に入れるわけがないので、石之助はそこにお金があるのを知っているはずがない。よって、お峰が盗むのを寝たふりをしながら実はこっそりと見ていたという説が成り立つのである。又、決定的なものとして、『樋口一葉全集1』塩田良平・和田芳恵・樋口悦編——筑摩書房——に載せられている未定稿の文章がある。これによれば、「見し人なしと思へるは愚かや」の後に「馬鹿く頼みし金の出来ずして、同じ数ほど此金に不足のたゞば、何処に向かん目角と

も知らず、さりとはおさなき事もする物也、見しが我なればこそよけれ、此家に忠義の犬どもが目にかゝらば唯二枚にてつながられものぞかし、折柄我れにも入用あり、罪はお序に背角てやるべし、親のものは子のもの、少し不足なれど、手ぢかなればと石之助、残りの束をふところにして、猶も空いびきにふとんかぶりて日を暮しむ。(まだ続くが省略)」という文章がつけ加えられていた。この部分を省いてしまった理由は明らかにされていないが、省略によつて『大つごもり』の内容は変えられたとは思えない。よつて、「みし人なし」のみし人とは石之助のことに他ならないのである。

ところで、残りの金を全て自分の懐に入れ「引き出しの分も拝借致し候 石之助」という紙切れを残した石之助の態度の意味を正しくとらえることは重要である。石之助は十八円の金を得たいと思つたかもしれないが、それよりもお峰を助けたいという気持ちが強かつた為の故意的な態度とみられるからだ。では、何故、他人のお峰を助けたいと思つたのだろうか。

石之助はお峰が御新造に断わられているのを居間で聞いていたのだろう。そして、お峰の行動の一部始終を見てしまった彼は、彼女を哀れに思うのと同時に、御新造に反感をいだいているのは自分だけではないことを知り、快くなつたのであろう。これらの経過によりお峰を助けようと思われ。石之助の行為は、お峰への同情というよりもむしろ御新造への反抗であつたかもしれない。確かに石之助は、夜中に車を飛ばして車町の破落戸がもとをたたき起したり、乱暴一途に品川へ足を向けたり、山村家の人たちに嫌がらせを言つて困らせたりにする放蕩息子であつたが、「やがて巻きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして」とあるように、貧

乏人に対しては優しい態度をとっている。石之助の放蕩は、手が後ろに回るようなものではなく、山村家とはかかわりのない貧しい人たちに家の金をばらまくといったものである。このことで御新造を始めとする山村家の人たちは頭をかかえるのである。「この世に勘当のなきはをかしけれ」と本文にはあるが、これは皮肉として書かれてはいるが、たとえ明治時代に勘当があつたとしても石之助は勘当されなかつたのではなからうか。もし、本当に大旦那が息子を恨んでいたのなら「これは貴様に遣るではなし、まだ縁づかぬ妹どもが不憫、姉が良人の顔にもかかる、この山村は代々堅気一方に……この家に恥は見するな」と言いながらも五十円を石之助に渡すことはしないであらう。もっともこの場合、「勘当」は却つて山村の恥、妹達の傷になりかねないのだ。石之助の優しい気持ちを多くの研究者は、仁俠心(注9)と言つているが、その仁俠心がなかつたら、どうして女中に過ぎないお峰に同情できようか。和田芳恵氏は、『近代文学鑑賞講座3』の「本文および作品鑑賞」の中で「見し人なしと思へるは愚かや」の一句について「ここまでのこの小説のテーマを割ることになるから失敗である。だから、この部分は書かない方が良かった。」と述べているが、私は賛成できない。この一句がなかつたら、石之助の行為は、お峰を意識しての行為かそれとも偶然の行為か曖昧になつてしまうからである。石之助の仁俠心によつて、お峰の盗みの行為は発覚されなかつた。けれども、お峰の気持ちは決して晴れるものではないと思えるのだが。

さて、お峰の盗みの行為を作者は、「孝の余徳」又は「石之助はお峰の守り本尊なるべし」というように決着をつけたが、研究者たちはどう考えているのだろうか。

湯地孝氏は、「作者はお峰が一部盗用した金の残りを全部石之助に持って行かせている。しかも御丁寧に受取りまで書かせている。その為、危うくもお峰を逃して石之助にすっかり罪を追わせている。これは作者のお峰に対する同情から出たことではあるが、結果はかえって甘く不徹底になってしまった。」と記している。村松定孝氏は『評伝樋口一葉』の中で、「小説がただ単に現実の模写にすぎなければ、この終わりには、たしかにマイナスであろう。しかし、小説にあっては現実を追求しながらも現実そのままでない、偶然が附加されてこそその価値が生ずる場合もあるので奇矯な筋を展開させるからこそ小説の芸術的妙味があり、読者にとってはそれが魅力ともなるのである。」

(中略) 一葉の場合は、これに反して、偶然が起ったがために、一層それまでのリアリティを印象づけ、作者のお峰への同情が絶対のものとして読者へこころよくつたわるのである。ひとつの重層的效果ともなりうる。(中略) 従って、彼がお峰の罪をかぶってしまったことにもいささかも、そこに唐突さがない。不自由さがない。むしろ、特殊な偶然が必然の集積としてみちびき出される。」としている。又、「石之助という存在を想定して、その罪を表面的には兎も角も覆いかくそうとしたのは如何に貧者としてその程度の抜け道はあってもよいではないかとひらき直ったすさまじいかまえたのだ。こんな女に誰がさせたのだといった社会への訴え、正直に働いているものがいつになっても幸福になれない世の中への怒り、それがああした悲しい空想を構成させたのもあったろう。」と言っている。木村真佐幸氏は『一葉文学の成立の背景』の中で、「この作品の終局の部分こそ一葉の屈折した交錯した悲痛な精神構造のものであった。」「つまりこれは一葉の現実生活の反映として、どうしてもこのように描かざる得

なかった内的苦悩」であり「己れの分身であるお峰への哀憐の情とでもいえる何か居たたまれないもの——そんな潜在意識を否定できないのではなからうか。そして、それがやがて結末の部分において『引き出しの分も拝借致し候 石之助』なる紙切れ一通によってお峰は一応は救済されることになるわけだが、これも先学が説くように一葉の切なる願望であることもいまさら言うまでもない。」と言っている。

確かにこのような結末は、湯地氏が言うように後々まで余韻を残しそうな曖昧な終わり方で不徹底である。しかし、小説の世界と一葉の现实生活の世界とを互いに照し合わせて考えていくと、一葉がお峰の救済者とした意味が次第にわかってくるような気がする。一葉はこの小説の中でお峰が罪を受けることによって読者を悲哀の世界へ引き連れようとは思ってはいない。極端なことを言えば人間は、運命によって富める家か貧しい家かのどちらかに生まれてくるが、貧しい家に生まれた人間は、富める家に生まれた人間にくらべて、あらゆる面で制約を受ける。お金を持っているか、否かにかかってくる。一葉は、自分自身の日夜、金銭問題に悩まされた貧しい生活体験を、小説を通じて、富める者への反抗として、訴えたかったのである。だから、一葉にとってお峰の罪ほろぼしは必要ではなかったと言える。しかし、小説の上では、懸け硯の中のお金が盗まれたことを山村家の人々が知らないわけにはいかなかった。もし、お峰が素直に白状して、御新造はお峰の立場(病気の伯父をかかえている)に免じて許したのなら、これは貧しい人が、富める人に助けられた結果となってしまう。そうであるから、「一見富める世界の人間のように見えながら、実はどちらの世界にも在しない、中間的な存在の石之助(前田愛氏

『大つごもりの構造』を救済の任に向かわせたのだろう。一葉は、自分の貧しい生活がなんらかの形で方向転換されることを望んでいた。そして、実世界において石之助のような救済者をどんなにも待っていたことか。

こうしてお峰は自分の罪が発覚しなすむが、本文は「……後の事しりたや。」という一句で終わらせている。この結び方、終わらせ方は大変興味深い。なぜなら、読者はこの一句によって、この後、果してお峰はどうなるのか想像してみたくなる。そんな効果をもたらした一句である。しかし、ほとんどの読者は、お峰が懸け硯の中のお金を盗んでしまったことが御新造をはじめとする山村家の人々に知られてしまつて罰を受ける場面は、想像したくはないのではなからうか。そして又、ことの始終を見ていた石之助が、正月以後も中村家で奉公に勤めなければならぬお峰につけこんで、彼女をゆするという場面も想像したくはないと思う。伯父思いで、奉公に熱心で、素直で優しい心を持ったお峰を助けてあげたく思うのは、石之助と私だけではな

いと思う。

ところで、『樋口一葉論』の中で湯地孝氏は、結びの形態について「……曖昧で……何んとなく物足りない。いい加減な片付け方があるので終に来てすつと気が抜かれて了ふかの感がある。望むらくは、そんな小細工をしないで、お峰の方へ疑ひの眼を向けさせて、どこまでも彼の女を苦しませて貰いたい。最後のくくりは難しいだろうが、その方がぐつと引締つただろう。」と述べているそう。しかし、一葉自身もこの先、お峰がどうなるのかは、わからなかつたのではないかと思う。彼女が貧乏の苦しみから開放されない限りは。だから、私はむしろ、彼女自身が一番、この後のお峰について知りたがっ

ていたのではないかと思う。

四

『大つごもり』は、作者樋口一葉自身の生活から生み出された文学である。それだから、登場人前の設定や登場人物の心情・行動は、一葉の心情と深いかわりあいがある。

『大つごもり』の中のお峰は、一葉自身にみたてることができる。現に、一葉はこの小説を書いた頃、彼女の人生で最も貧窮を極めており、頼みの綱の半井桃水(注10)や村上浪六に、借金をしに出掛けているが、いづれも断わられている。又、彼女が通っていた歌塾「萩の舎」でお金の紛失事件が起り、彼女はその容疑にかけられている。そんなことが、『大つごもり』に盗みの場面を取り入れるきっかけを作らせたと言える。疑いはかかったが、真偽のほどは不明である。しかし小説を書きながら母と妹までも養っていかなくてはならなかつたのは事実で、彼女はどんなにかお金を望んでいたことか。そして、小説の中でお峰に盗みをさせることによって、自分の貧困のみじめさを爆発させたのである。彼女は石之助のような救済者を自分の現状の生活の中にも求めていたのだろう。自分にはかなえられないことを小説の中で描くことによって、彼女は彼女自身の辛い苦しみを少しでも開放させようとしたのであろう。

石之助は一葉の兄、虎之助にみたてることができる。兄、虎之助は少年の頃、不良むすこであったので、一葉の両親によって他の家の養子に出された身という。

お峰の叔父の初音町の貧しい描写は、かつて一葉の母多喜が、乳母として奉公していた、稲葉家の様子をふまえている。明治二十五年十

二月二十八日、彼女は『暁月夜』(注11)の原稿料が思ったよりも多かったので、金子を歳暮にと、母とともにこの家を訪ねている。この時、稲葉家は没落の路をたどっていた。稲葉家を訪ねたのも、『大つごもり』を書いたのも、「大つごもり」の頃である。この家を訪ねたことは『大つごもり』を書いた動機の一つに考えてもよいだろう。

『大つごもり』は、一葉の作品のほとんどが恋愛を扱っているのに対して、ここでは一人の貧しい少女の盗みが扱われている。そして、この小説に出てくる人物は、どの一人をとってみても、我々の周囲に日々生活している当り前の人間である。この小説は、その当り前の人間たちのいる「山村家とお峰一家の織りなすさまざまな人間関係をたえず非情な手段にすぎない金銭の量に置換し、意味づけて行く過程に求められる」(前田氏、前掲書)との論も肯けるし、『大つごもり』は、「をどり」「ほまち」などの商人の世界のこぼれを用いたり、写実的描写を重んずる井原西鶴の手法を取り入れながら、お峰という優しい女性を描くと同時に、石之助を通じて貧富の差への秘やかな抵抗を描いたものと見ることもできるのである。

今まで、樋口一葉の小説、『大つごもり』について、長々と述べてきたが、私は今、二つのことを主張したいと思う。

一、『大つごもり』では、石之助の仁侠心の助けによりお峰の盗みの行為は発覚しなかった。お峰に盗みをさせた一葉の心のうちには、貧富の差への反抗があった。お峰の盗みの行為が、「引出しの分も拝借致し候 石之助」という一枚の紙切れによって隠されたのと同時に、一葉の貧富の差への反抗までも隠されてしまった。小説では、お峰の盗みについては、一応の決着がつけられているが、一葉自身の貧困生活からくる苦悩は、まだ、解決されてはいないのである。「後の事知

りたや」この句は、そのことを暗示しているように思えてならない。一、一葉は、お峰のように奉公に上がることによって、女中になりきることができたのならば、随分と精神的に楽な気持ちで過せたのではないかと思う。しかし、武士の娘として育てられた彼女にとって、それはできなかった。又、彼女の文学の才能が、それを許さなかった。そこに、一葉の悲劇があったのだと思う。

『大つごもり』は、明治二十九年二月号の『太陽』に再掲されたが、それを採りあげた『めざまし草』(注12)の批評では、「この作者のものとしては、優れたる際には非ざるべし。」という程度であった。この小説が一葉の作品の中で、かなり重要なものとして見られるようになったのは、近年のことであるようだ。これは、一葉が庶民の苦しみの代弁者という立場に立って書かれているということが、裏付けられてからであるようだ。ともあれ、『大つごもり』は、彼女の文学を確立させるのにきっかけを与えた作品であり、現在では、『たけくらべ』・『にぎりえ』・『十三夜』・『わかれ道』とともに、彼女の作品の中ですぐれた作品として、ならべられている。このように、『大つごもり』がすぐれた作品とされるのは、この作品が、一葉自身の生活の体験より生み出されたものであると同時に、貧富の差への反抗の意識もそこから出ているからだと思ふ。

明治二十六年七月に一葉が商いをはじめたために移り住んだ、下谷竜泉寺町の家には、深いが良い水の出る井戸があったそうだ。『大つごもり』のリアルな書き出しは、竜泉寺町の井戸を思い出しながら書かれたものであると思われるようだ。そして、一葉もお峰と同じように駒下駄をならして、この井戸から水を汲んでいたのである。その光景が、目に浮んできそうである。

注

1、住み込み女中

明治二十三年五月から九月まで、一葉は、歌塾「萩の舎」で住み込み女中をした。十八歳の時。彼女が小説家として立とうと決意し、『かれ尾花一もと』を執筆する前の年。

2、平田禿木（一八七三〜一九四三）

英文学者。随筆家。「文学界」創刊に参加し、評論や翻訳などを発表。主な著者に「英文学印象記」・「文学界前後」などがある。

3、塵中日記（「塵之中」、「日記ちりの中」等の題が見える）

一葉の日記。竜泉寺町にいたときの日記を総称して言っている。

4、三月しばり

三カ月の期限。

5、をどり

期間がきても返すあてがつかず、不本意ながら切り替え日の利息を二重にして払う仕組み。

6、十二尋

一尋は約六尺。二・六メートル。

7、ほまち

臨時の余徳として認められるが、半ば慣習になっているとしてもあくまで表には出せない収入。

8、不了簡

よくない行ない。

9、仁俠心

弱い者が苦しんでいることを知って、だまっていられなくなる気持ち。

10、半井桃水（一八六〇〜一九二六）

朝日新聞の記者であり、同紙に戯作的小説を発表していた。一葉は、彼によって小説を書くきっかけを得、ほのかな恋心を抱いていた。

11、暁月夜

明治二十六年二月、「都の花」発表。

12、めざまし草

文学評論雑誌。明治二十九年一月から明治三十五年二月まで刊行。しがらみ草紙（明治二十二年十月から明治二十七年八月まで刊行）の後身。森鷗外・幸田露伴・落合直文・斎藤緑雨らが主宰

参考文献

○『樋口一葉研究』 吉田精一編 新潮社

○樋口一葉——その生涯と文学——

西尾能仁 稲稜社

○『大つごもり』の構造（日本文学研究資料叢書より）

前田 愛 有精堂出版

○『商人としての樋口一葉』

後藤積 中央公論事業出版

○『樋口一葉研究』

松坂俊夫著 教育出版センター

○樋口一葉 人と作品 9

小野英紗子著 清水書院

○作品と作家研究 『評伝樋口一葉』

村松定孝著 実業之日本社

○樋口一葉の人と作品 和田芳恵編 学習研究社

○樋口一葉 島木英著 紀伊國屋書店

○「樋口一葉と西鶴」(昭和四十八年三月「解釈と鑑賞」)

石丸 久 至文堂

○「天折のロマン樋口一葉」(昭和四十九年十一月

「解釈と鑑賞」特集) 木村真佐幸 至文堂

○「日本の古典文学と近代女流文学」

(昭和四十七年三月「解釈と鑑賞」)

菊田茂男 至文堂

○近代文学鑑賞講座3 「樋口一葉」

和田芳恵著 角川書店

○樋口一葉集——日本近代文学大系 角川書店

○樋口一葉全集1 塩田良平・和田芳恵・樋口悦編

筑摩書房